

バシェの音響彫刻プロジェクト

2022 年度活動報告

1. バシェ・セミナー開始（6月9日、本学大合奏室）

音楽学部の学生から、バシェの音響彫刻を用いて創造活動をしたという声上がり、学内で「バシェ・セミナー」を開始した。初回は10人ほどが集まり、バシェの音響彫刻についてのレクチャーと、パレット・ソノールの試奏を行なった。9月までの間に計5回セミナーを行い、その成果を9月18日の北山フェスティバルにおいて披露することができた（後述）。



バシェ・セミナー開始

2. 大阪府民講座での講演（6月25日、大阪府立中央図書館）

『EXPO'70 大阪万博の記憶とアート』という大阪府民向け連続講座のうち、第2回目「1970年の大阪万博とバシェの音響彫刻」を担当した。万博閉幕後40年経ってバシェの音響彫刻が修復・復元されたことを大阪府民に知ってもらいたい良い機会になったと思う。

3. 「クリエイティブ・アート・スクール」におけるWS（8月6日、千代田アーツ3331）

パレット・ソノールを解体して東京へ運搬し、当日会場で受講者と一緒に組み立てるところからワークショップを開始した。視覚障害のある方や知的障害のある方の参加もあり、さまざまな形のパフォーマンスを試みられたことは、私自身にとっても貴重な経験であった。



クリエイティブ・アート・スクールにおけるWS

4. 「東京藝大アーツ・プロジェクト実習」におけるWS（8月8日、東京藝大取手キャンパス）

東京藝大生、幼児～小学生、中学生以上（一般成人も含む）の3部門に分けてワークショップを行なった。年齢層の違い、興味関心の違いなど様々な様相を持つ人たちを無心にさせ、遊び心をくすぐり、その音響空間の中に身を浸す心地好さを、パレット・ソノールを通して共有できたことは、バシェ研究において大変意義深いことであった。



東京藝大取手キャンパス子ども対象WS

5. 高校生の音響彫刻研究（8月28日、本学学生会館ホワイエ+岡田研究室）

京都市立西京高校の2年生3名が、バシェの音響彫刻を見るために本学にやってきた。自由研究の対象として、芸術のジャンルを跨いだ作品について調べているうちにバシェの音響彫刻に行き当たったという。早速彼らには、学生会館ホワイエで実際に音響彫刻に触れ、音を体験してもらった。年度末に論文として研究成果をまとめるそうだが、どのような論文が仕上がるのが楽しみである。

6. 京都子どもの音楽教室におけるWSと鑑賞クラス（9月10日、京都子どもの音楽教室）

同教室の教員対象のワークショップを今年度やっと行うことができた。鑑賞クラスにおいても、子どもたちに自分で触ってもらって実際に音を鳴らす時間を、できるだけ多く設けた。今後、リトミック教育などの中でもパレット・ソノールを用いた音楽を創作し、京都から新しい音楽表現を発信して行ってほしい。

7. 「北山フェスティバル」での公演（9月18日、京都コンサートホールエントランス）

京都市の北山通界隈で開催されたアートプ

ロジェクト「北山フェスティバル 2022」（主催／北山モザイク実行委員会）において、「バシェの音」展と題して、展示と演奏を行なった。バシェ・セミナー（前述）のメンバーを中心にパフォーマンス作品を創作し初演した。今後も一層こうした創造活動に取り組んでいきたい。



北山フェスティバル 2022 での「おとなりさま」初演

8. 芸大祭でのデモンストレーション（11月7日、本学野外ステージ）

沓掛最後の芸大祭では、打楽器専攻生9名とバシェ・セミナーから3名、計12名が野外ステージでパレット・ソノールの演奏デモンストレーションを行なった。普段、屋内で演奏することの多いパレット・ソノールだが、視覚的には野外円形ステージに映え、活動の紹介としても効果があったと思う。



野外ステージにおけるデモンストレーション

9.フランス・バシェ協会メンバー来訪（12月7日、大学会館ホワイエ）

フランス人音響技師マリル・キュフィニさんがバシェの音響彫刻を見るために京都芸大を来訪。桂フォーンと渡辺フォーンは日本にしかない芸術遺産である。フランスから遠く離れた異国の地に残されたバシェの音響彫刻を、なんとしても護っていかねば！ という思いを強くした。

岡田加津子



桂フォーンを試奏するマリル・キュフィニさん